

自然と人間の共生 ～ 21世紀への道（新シリーズ）

第1回：始めに

- 歴史的に見ると、我々がこの地球という惑星の生命システムや生物多様性を救うということに目を向け本気で取り組み始めたのはごく最近のことである.....すべての人々の偉大な成功を祈っている。それよりほかに、もはや取り得る道はないのだから。

（ビル・モリソン「パーマカルチャー」日本語版への序文より）-

21世紀に向けての最大の課題の一つは「環境問題」である。特に自然環境や農業に関係する問題について考えてみた場合、生物多様性の保全、自然と人間との共生、資源循環型社会、環境保全型農業、有機農業、都市と農村を結び試み.....等々、キーワードとなるような言葉はいくつかあげられる。「田舎暮らし」や中高年者の「新規就農」、「農的生活」という言葉も新聞や雑誌でよく見かける。しかし、「農業」や「田舎暮らし」がそれほど簡単なものではないことも厳然とした事実である。だからこそ、有機農業から化学農業への転換、農業人口の減少、都市への人口集中等々が過去に日本で起こり、そしてそれは途上国でも同じで、現在起こりつつある。

「農的生活」の提唱者・大塚勝夫氏が説くように、全員が100%の農業、農的生活をめざす必要はないし、不可能である。とりあえず1%でもいいから、自然や農業に触れるような時間や機会を作り出す、そしてできればそれを次第に増やしていく。各自ができる範囲で、できることから始める。その積み重ねの中からは物事は変わっていかないのかもしれない。また、「農的生活」という言葉を考える時に同時に思うことは、農業は国際競争をしなければいけないのか？、とか「農業と環境と開発の関係」ということである。いうまでもなく、日本の水田維持は特に中山間地の国土保全と密接な関わりがあり、単純に米の価格という「経済性」だけでは判断できない。日本の米を国際競争という観点だけから見ると、結果としてより農業が衰退し、それとともに環境破壊が進む、つまり森も田も畑も荒廃していくおそれが多分にある。「真の豊かさ」論とも関連があるが、貨幣経済からの脱却、自給自足、穏やかな鎖国、WTOシステムからの離脱、といった「離脱の戦略」が生き残りのための有力な手段の一つかもしれない。そしてこれはもちろん日本だけの話ではなく、商品作物の栽培等の形で世界経済の中に取り込まれている多くの途上国の農民にとっても当てはまることである。

さらに、「都市化と過疎化の問題」も重要なテーマの一つである。物質的な豊かさの追求や労働としての農業を嫌う、といったことだけではなく、地方の過疎化の原因はさまざまであろう。その一つに、「隣組」などの近所つき合いのわずらわしさや、常に見られているような息詰まり感等の「田舎」ゆえの住みにくい現実もあるだろう。しかし、都会人で田舎にあこがれている人は結構多い。「週末村民」のように、村に定住しなくても村民になることはできないだろうか、という人もいる。もちろん、もっと積極的に田舎で農業をしたいという人もいる。こうした人たちと農村をつなぐための、「都市と農村との交流」も重要であろう。

このシリーズでは、人間と自然との共生をめざすいくつかの国内あるいは海外の事例を取り上げ、文献資料だけでなく、実際に取材あるいは調査に出かけてレポートする。そして、それらの持つ意味や課題、さらには途上国との関連までも考えていきたい。ここで紹介する事例は、必ずしもそれが代表的なものであるとか、非常にうまくいっているというものばかりではない。それはたまたま我々のアンテナに引っかかった、というだけでしかないかもしれない。しかし、ある意味で、すべてはそんな偶然な出会い、あるいは「縁」から始まるものではないだろうか？ 知り合わなければ何も始まらないのだから.....

- 自然と人間の共生関係を大切に、農業を中心に置き、農的生活を志向する産業社会、私はそこに新しい未来を予測する。そのような農的共生社会の創造が不可能ならば、人類は死滅の危機に瀕するであろう.....
（大塚勝夫「共生時代のエコノミー」序にかえてより）-

第2回：屋久島のゼロエミッションの試み

屋久島は一説に樹齢 7,000 年以上ともいわれる「縄文杉」の発見を機に世界的に知られるようになり、1993 年のユネスコ世界遺産登録により、屋久島の自然とこれに関わる人々の暮らしが国内外で一層脚光をあびるようになった。また、同じく 1993 年に町議会で議決された「屋久島憲章」には、自然と人間との共生や歴史・伝統、自然の恵みを生かした屋久島らしい町づくり等の目標がうたわれている。自然と共生し、廃棄物を出さない資源循環型の社会を造るために、屋久島では「ゼロエミッション（廃棄物ゼロ）」のシステム作りを目指している。この構想では、1) 島からの化石燃料の追放、2) 島の資源の徹底活用、3) 廃棄物ゼロ社会の実現、の 3 つの目標を掲げている。

このうち、「化石燃料の追放」は、火力発電や自動車燃料として島へ流入する化石燃料（重油、ガソリン、軽油等）をなくすことを目標とする。屋久島は離島にしては水が豊富で、すでに水力発電で必要電力の約 70% をまかなっている、という背景がある。これは「月 35 日雨が降る」ともいわれ、年間平均雨量 4,400mm、年最大雨量 10,000mm にものぼる、という自然条件に支えられたものである。既存の水力発電に加えて、火力発電に替わる太陽光発電、風力発電、小型水力発電等の最適な組合せにより、エネルギーの島内自給化をめざしている。また電気自動車の導入により、自動車燃料としてのガソリン、軽油の追放も構想されている。

「島の資源の徹底活用」に関しては、資源の自給自足及び地域振興の視点から地場資源の活用を図ろうとしている。屋久島固有の薬草・薬樹の開発、温暖な気候を生かした作物・果樹・花卉栽培の導入、豊かな自然資源を生かしたエコツーリズム等の観光開発等があげられる。一方、「廃棄物ゼロ社会の実現」に関しては、一般廃棄物の分別リサイクルや産業連鎖による資源の循環・再利用を図り、廃棄物をゼロにすることをめざす。家庭から出る廃棄物は自家処理によって生ゴミは堆肥化し、産業廃棄物も農林水産関係は様々なリサイクルの試みがなされている。

しかし、可燃ゴミはすべて焼却、不燃ゴミ・粗大ゴミは埋立処理という現状の中で、家具、家電、廃車車両等の粗大ごみの増加や、観光客のもたらすゴミ・排泄物が問題になってきていることも事実である。廃棄物をなくし、資源循環型の社会をめざそうという屋久島での動きは、まだ始まったばかりである。屋久島なりのスケールとテンポで、「島」の特性である "closed system" や「世界遺産」を活かしたユニークな地域開発、あるいは自然との共生のあり方を見つけていってほしい。



太陽光発電



ゴミの不法投棄

電気自動車用の
エコステーション



廃車の山

第3回：ジンバブエのパーマカルチャー

「パーマカルチャー (Permaculture)」という言葉は permanent と agriculture から成る造語で、オーストラリアのビル・モリソンらによって提唱された、自然との共生や地球環境への配慮を重視し、人間にとって恒久的持続可能な環境を作り出すためのデザイン体系である。自然に逆らうのではなく、自然に従うという理念で、生態学的に健全で、経済的に成立一つのシステム、長期にわたって持続しうるシステムを作ることをめざしている。

パーマカルチャーのデザインで作った「畑」は、ちょっと見には「ジャングル」のようにも見える。いわゆる「普通の畑」のようには整然としてはいない。多年生の樹木や灌木、草本(野菜や草)、菌類、根系等に基礎を置いた多種作物栽培で、多様性を持たせることでより安定な系を求めている。また、チツソ肥料を使う代わりに緑肥やマメ科の木を使う、殺虫剤を使う代わりに生物によって害虫をコントロールする等、生物資源を活用して化学肥料や殺虫剤を減らすことをめざしている。ただ、パーマカルチャーは、単に有機農業や資源循環型の複合農業を薦めているだけではない。例えば地形や風向き、洪水時の水の流れ方等を考慮した家の建て方、あるいは畑のデザインもその重要な要素の一つであり、生活のすべてに対する工夫が含まれる。その意味でパーマカルチャーは、単なる農法の一つではなく、「生き方」そのものである、といえる。

パーマカルチャーは現在、世界各地でその地域の自然や風土、社会環境に適したやり方で広がり始めている。ジンバブエでは Natural Farming Network (NFN)、PELUM (Participatory Ecological Land-Use Management) Association 等の NGO がパーマカルチャーの実践や普及(トレーニング)に取り組んでいる。NFN の一員である Fambidzanai Permaculture Centre は首都ハラレ郊外に 40ha の敷地のトレーニング・センターを持っている。ここでは、持続可能な農業の紹介、農薬を使わない害虫管理、参加型農村評価手法、有機農園、養蜂、総合的な資源管理 (Holistic Resource Management) 等のトレーニングコースがあり、それぞれ 1 ~ 2 週間程度である。これらのコースには国内・海外からの参加者があり、宿泊施設もある。

また PELUM は、東部・南部アフリカ 10 ヶ国に支部があり、住民参加型の持続的資源管理を目的として 1992 年に設立されたネットワーク型 NGO である。いくつかの NGO がメンバーとして参加しており、それぞれ地域 (Community) に根ざした持続可能な農業や村落開発の実施をめざしている。PELUM は、ワークショップの開催やトレーニング実施に重点を置いて、最近ジンバブエ大学に「PELUM College」という「持続可能な農業」に関する 2 年間の長期コースを開設した。これは講師陣が大学関係者だけでなく、NGO や農業省 (AGRITEX) から参加するというユニークなものである。



パーマカルチャーの畑



チキントラクター (鶏による「除草、施肥」)

第4回：桶ヶ谷沼の自然と管理

静岡県の西部、Jリーグのジュビロ磐田で有名な磐田市にある桶ヶ谷沼は、町にも近く、最も開発されやすい位置にありながら、全国でも珍しいトンボの王国が残されている。春から秋まで、いろいろな種類のトンボが観察できるだけでなく、その他の水生動植物や周囲の森林・草原も含めて豊かな生物相が温存されている。

桶ヶ谷沼の植物の特徴は豊富な水生植物にあり、ヨシやマコモに覆われた沼は原生的な景観を醸し出している。カキツバタ群落は分布的にも貴重であり、当地方では絶滅寸前のイヌタヌキモやヒメビシも繁殖している。さらに、環境庁のレッドデータブックの絶滅危惧種として知られているオニバスも水面に葉を広げている。沼の周囲は常緑広葉樹や落葉広葉樹を中心とする樹林で覆われている。沼に湧出する地下水は、こうした自然林にしみ込んだ雨水に由来しており、良好な水質が保たれている。さらに、この林はトンボの餌場であり、強風時の避難場所であり、休息の場所でもある。このように、周囲の森林環境が、沼の生物を守る鍵となっている。

桶ヶ谷沼を代表する動物はなんといってもトンボ類であり、これまでに65種類が確認されている。なかでも注目されるのはベッコウトンボで、環境庁のレッドデータブックでは絶滅危惧種に取り上げられている。また、野鳥の種類が豊富なことでも有名で、これまでに140種類が確認されている。私が訪問した11月には、マガモを中心としたカモの群が水面で羽を休めており、アオサギやカワセミも観察することができた。

沼に人為的な汚水が流れ込まなかったという幸運な自然条件はもちろん、関係者の長期にわたる努力が無かったならば、こうした桶ヶ谷沼の素晴らしい自然は残されて来なかったであろう。県は土地買い上げ、自然環境保全地域や野生動物保護地区としての指定を行い、さらに桶ヶ谷沼保全対策検討委員会を設置し定期的に会合をもっている。そして、地元の自然保護団体が、長い間桶ヶ谷沼の保全のために尽力している。観察路の整備や観察者に対する指導はもちろんのこと、水生植物等に被害を及ぼすザリガニ退治や周辺の自然林の管理といった地道な努力が続けられている。このような団体の活動に直接あるいは間接に関わることによって、自然というものが極めて微妙なバランスの上に成り立っていることを肌で感じる事が出来る。そして、こうした体験こそが自然と人間の共生を考える第一歩につながると思う。



ヨシやマコモに覆われた湿地と周辺の林



水面で羽を休める水鳥達

第5回：フィリピン・ボホール島のエコツアー

ボホール島は観光で有名なセブ島の東隣りに位置する、面積約 4,100km²（フィリピンで 10 番目の大きさ）、人口約 100 万人の島である。主な産業は農業でそれも自給が中心で、他にこれといった産業も見当たらない。ある調査によれば、農家の平均年間収入は一戸当たり 30,000～40,000 ペソ（約 10 万円）程度である。また、支出の半分近く（多い場合は 70%）が食費であり、エンゲル係数が非常に高い。ボホール島へは 99 年 2 月まではマニラからの直行便があったが、航空機のリース契約の関係で現在は運行が中止されており、セブ島からの高速フェリー（所要約 1 時間 30 分）で連絡されている。

ボホール州の首都であるタグビラランは人口約 6～7 万人であるが、市内には大きなスーパーマーケットが 2 つあり、食料品、衣服、おもちゃ、日用雑貨等々、さまざまな商品が並べられている。ここにも確実に大量消費社会への誘いがある。公共交通は軽トラックを改造したミニバスやジブニー、トライスクル（バイクの隣にサイドカーのようなものを付けて客を乗せるタクシー）が主流であるが、最近自動車の数が増加し、普通乗用車のエアコン付きタクシーも何台か走っている。

一方ボホールは、珊瑚礁や熱帯魚を見ながらスキューバダイビングを楽しめるきれいな海、チョコレートマウンテンと呼ばれる円錐形をした山が 1000 以上も並んでいる奇観、ターシアと呼ばれる世界で一番小さい珍しいサル、鍾乳洞等々の豊かな自然にも恵まれている。最近では、このような豊かな自然資源を観光資源としたエコツアーを観光の目玉にしようという動きがある。前述したように、現金収入の途が農業しかないため、新たな収入源としても期待されている。またそのために、これらの自然を重要な資源と考え、持続的に利用していくために環境を保全しようという動きも出始めている。貴重な収入源になるというのが直接的な理由とはいえ、地域の自然環境を守っていくという動きが地元から沸き上がってくること自体は歓迎すべきことだろう。ただ、エコツアーといっても、現状は観光客に既存の観光資源をただ見せているだけである。今後の課題として、きちんとガイドのできるインストラクターの教育や養成も必要であろう。

隣のセブ島では、観光客目当ての高級ホテルやゴルフ場が乱立しているが、観光施設があるセブ市の他は貧しい農村が大半である。ボホールにはセブ島に対する対抗心も強いようで、セブ島の「乱開発」を反面教師として横目で見ながら、セブ島との違いを意識しつつ、独自の観光開発を進めていける素地があるのではないかと感じた。



ボホール島の観光資源イメージ図



珍猿・ターシア

第6回：屋代村塾を訪ねて

本シリーズの第1回「始めに」で農的生活の提唱者である大塚勝夫先生を紹介させて頂きましたが、シリーズの続行中に先生の訃報に接するという、本当に残念なことになってしまいました。そこで今回、先生の御霊前にご焼香させて頂くと同時に、その後も農的生活に関わる活動が続けられている屋代村塾を訪ねさせて頂きました。

屋代村塾のある高畠町は米沢の北方に位置し、雪を戴いた飯豊連峰や朝日連峰を見渡せる極めて自然に恵まれた地域である。平地には水田が広がり、山の斜面を利用したブドウやサクランボの栽培も盛んである。屋代村塾の前には田植えが終わったばかりの水田が広がり、牛舎からは牛の鳴き声が響いていた。ブドウの開花時期でもあり、整枝、摘果、その他の処理に忙しい時期にもかかわらず、先生の遺志を継いで屋代村塾の活動を続けてお兄さまご夫婦には我々の訪問を快く受け入れて頂いた。屋代村塾では主に周辺の農家が塾生となって、学生や場合によっては海外からの研修生を受け入れている。韓国人夫婦を受け入れた塾生から、心暖まる交流のお話をうかがうこともできた。屋代村塾に併設されている五右衛門館には、伝統的な道具類が整備されており、いろいろな体験ができるようになっている。また、この建物はこれまで主に都会からの長期滞在者用に使われていたということで、高畠町には都会からの就農者の数も多い。

夜には蕨や蒟蒻に舌鼓を打ちながら、大塚様ご夫婦や塾生の話を聞く事が出来た。庭先から収穫したばかりのミョウガや蓴も食卓に並び、採れたての野菜のおいしさを改めて感じ、三里四方で採れたものを食べる自給自足的な生活の持つ豊かさを再確認することとなった。こうした豊かさこそ、我々が高度成長の過程で失ったものではないだろうか。研修生が農村生活を体験すると同時に、こうしたことを感じることも屋代村塾の重要な役割であろう。ただし、大塚夫妻も指摘しているように、屋代村塾を運営していくことはそれ程容易ではないし、趣味的な農業だけでは日本の農業の将来はどうにもならないことも事実である。

我々は途上国援助の現場に身を置く人間として、利便性を享受しつつも大切な何かを失いつつある先進国での生活と、不便な中でも豊かさを感じることができる途上国での生活の両方を体験している。大量のエネルギーを消費する現在の文明が「持続可能」であるとは決して思えないし、途上国がこうした文明を目指すことにも疑問を感じる。自然と人間が共生し、資源の持続的な利活用を模索する中にこそ本物の生き方があるような気がする。今後とも、「自然と人間の共生」という考え方を念頭に置いて、国内における共生を目指した様々な活動や、途上国における持続的な開発に取り組んでいきたい。

最後に、心より大塚勝夫先生のご冥福をお祈り申し上げます。



屋代村塾



水田とブドウ畑



五右衛門館